

第二講 南方の民族と宗教

東京帝大教授
會員文學博士

宇野圓空

この頃南方といはれるのは大體ニューギニアから東の方は暫く除いて、アジア大陸の東南部で、佛印、泰及びビルマを含む東南アジア半島と、これにつゞく西南太平洋上の舊蘭領東印度諸島とフィリッピンなどのインドネシヤ群島との二つの部分に分れるのである。これを現在の宗教分布の上からいふと、大陸の方は概して佛教圏であつて、佛印の人口凡そ二千六百七十萬人の中の二千三百萬人ばかりが佛教徒である。泰國の人口は一千四百五十萬、その中で佛教徒は彼これ千三百七十萬、又ビルマも人口千五百萬近い中で千二百三十萬ばかりの佛教徒を持つてゐる。ことに泰國では佛教を憲法上でも國教と規定して居り、昨年はれた日泰同盟の調印式の如きも寺院の中で行はれ、最近の對米宣戰の布告も佛前で行はれた位に佛教が公私の生活に支配的である。しかしこの三國の中、佛印では、その大多數を

占める千六百萬人の安南人が大部分佛教を奉じてゐるが、この方の佛教は千五六百年も前から支那の方から流布したものであつて、寺院及び僧尼を主とする宗旨はすべて禪の系統となつてゐるが、實質的に民衆の信仰は阿彌陀佛や觀音の信仰を中心とする淨土教系統である。もちろんこれらはその本源が支那文化の延長であるだけに、一方では日本でいふやうな宗派的教團の區別はなく、他方では儒教即ち孔孟の教や、又老子の教へから出てゐるといふ道教の信仰や儀式を多分に混へてゐて、現に道教風の寺觀廟宇やその祭儀等も盛に行はれてゐる。これに對して泰やビルマにおける今の佛教、又佛印の中でも南方のカンボチャ人や西部のラオス人の奉じてゐる佛教は、今から五六百年前にインドの南のセイロン島から傳つて來たものである。それを日本では小乘佛教とか、又は南傳佛教などと言ふが、これは

梵語ではなしにこれに似たパリー語で書いた經典を據所とし、その教の内容も僧侶の持戒修行の風も、支那や日本の佛教とはよほど異つたものである。

それになほ同じ大陸續きではあるがその突端のマライ半島、人口からいふと支那人即ち華僑が一番多いけれ共、本來はマライ人の土地であつて、それからスマトラ、ジャワ及び蘭領や英領であつたボルネオに續いて、宗教の上では所謂回教圈即ちマホメット教徒を主とする領域となつてゐる。その總人口は七千萬人にも上るが、その中の五千萬人以上は回教すなはちアラビア語でイスラムといひ、普通にいふマホメット教の信者である。そして同じ東南アジア群島即ち東印度諸島の中でも、フィリッピンの方は周知の通りキリスト教圈である。こゝはスペイン領時代から久しくカトリックの傳道が行き届いて、これ亦人口一千六百萬の内、九割近くまでがキリスト教徒であり、この點舊蘭印方面とハツキリした對照をなしてゐる。但しこのフィリッピン群島の中でも先に皇軍が上陸した時にその王様サルタンが忽ち歸順したホロの島からミンダナオ島の南岸一帯にはモロ族といふのが、分布してゐて、これが全體で約四十萬人ばかりマホメット教徒として介在してゐる。その代りに

舊蘭領東印度の方では、北セレベスのミナハサ州は全部その住民がキリスト教徒であり、他にチモル島や又ボルネオ、スマトラ等の内地には相當にキリスト教の傳道が行はれてゐる。かういつた工合に現在の宗教分布といふ上から見て南方即ち東南アジア半島と、東南アジア群島とは、世界の三大宗教であるところの佛教と、マホメット教と、キリスト教との三つの宗教圈、或は文化圈といつたものを形づくつてゐる。その中で人口からいふとマライ人ジャワ人を中心としてのマホメット教徒が一番優勢であり、これに匹敵する信者の數を持つのは佛教であつて、これが安南人における支那系の佛教と、カンボチャ人、泰人、及びビルマ人に於けるセイロン系佛教との二群に分れるのである。

そしてこれを三つ或は四つの宗教圈或は文化圈に分けて見るのは、單にこれらの大宗教が地域や人口の上でいかに分布してゐるかといふ問題ばかりではなく、その宗教に附隨して一般文化と民族生活の様相の異同がそこに現はれてゐるのである。すなはちこれらの國々ではさういつた宗教が各々特別な經典を讀ませ、特殊な儀式やお祭を營むだけでなく、何れもこれに附隨して文學や藝術といつた精神

文化から日々の生活様式、社会的慣習にいたるまで、夫々
 本國から特殊なものを持ちこんで、それが各地の住民に
 反映してゐるのである。

現にキリスト教のごときは全體の上からいへば信徒の數
 も比較的少なく、その傳道の年代も寧ろ古い方ではないの
 であるが、これに背景となる歐洲の近代文化を伴つて來て
 その文化的影響は強いものがある。これに反してマホメツ
 ト教は最初はずでに六七百年も前からマライ半島やスマト
 ラに入つたのであり、舊蘭印方面ではその數量上の勢力が
 大きいにもかゝらず、諸民族の生活文化を動かしてゐる
 程度はやゝ浅いのであつて、殊にその信仰上の教化はやゝ
 上滑りしてゐるといふ觀がある。その原因の一つは蘭印一
 帯からカンボチャやビルマ、また或程度フィリツピンには、

さらに古く南印度から來た宗教と文化とが、數百年或は千
 何百年にわたつて行はれてゐたので、それらの直接、間接
 の感化力が民族生活の上に抜け難いものになつて根を下ろ
 してゐるからである。ジャワ、スマトラを先にして、最初は
 千七八百年も前に印度教即ち昔のバラモン教と、またこれ
 に混つて南インドの大乗佛教といはれるもの、殊にわが國
 でいふ密教風のものが傳はつた。そしてこれ等の宗教を先

達として華かな中世インドの文化が、群島及び大陸の南部
 から周圍の民族に廣く行き渡つて、それが何百年の間に原
 始的な東南アジアの諸民族を文化的に陶冶し、それまで多
 くは未開の状態にあつたものを、文化民族として新東南ア
 ジア民族にまで開けさせたのである。同時にこれがマホメ
 ツト教であれ、キリスト教であれ、又ビルマ・泰におけるセ
 イロン系佛教であれ、その後流傳した諸宗教にまで大き
 な影響を與へて、今にその地方の住民の生活を支配し、文
 學といはず、藝術といはず、種々なる民族文化の上に力強
 くその特質を殘してゐるのである。

さらに又この東南アジア半島なり群島には、この高等文
 化の洗禮を受けない舊東南アジア民族といふべき未開民族
 がなほ多數に残つてゐる。これらのものはフィリツピンの
 各島にも随分見出されるが、大陸でも、或は佛印のモイ、
 チヤム諸族、泰やビルマのカレン族ワ、カチンなどがあ
 り、又舊蘭印ではボルネオ、セレベス等の内地にもダイヤ
 ク族とかトラジャ族などがある。これらは實はインドの文
 化の影響をあまり強く受けてゐない東南アジア民族生抜き
 のまゝの原住民であつて、各々その民族に固有な宗教や文
 化を今にそのまゝ保持してゐるのである。それは單に宗教

ばかりでなく、これに伴ふところの生活文化を含めて、東亞に於ける農耕文化といふべき特徴を具へてをり、食物のごときもわれ／＼と同じく米が主食で、稻を耕作する生活を基調としての特有の文化と、これに伴ふ宗教や信仰を保持してゐるのである。そしてこれが又東南アジアの文化民族といはず、未開民族といはずそれら全體を通じてその生活文化の根柢をなしてゐるのであるから、この地に於ける古くからの印度の宗教文化の感化以前の民族的な底流を深く突込んで考へるには、この東亞民族としての信仰乃至文化の特性に注意しなければならぬのである。しかもそれが其後に來る印度の宗教文化は言ふまでもなく、さらに佛教であれ、回教であれ、キリスト教の感化をも通じて、すべてを民族性としての農耕文化の方向に特徴づけ、宗教的信仰を含めての民族文化の傾向に特に東亞的な農耕文化の性格を今なほ顯著に示してゐるのである。

こゝで農耕文化といふことについて一言斷つて置きたいのは、今日世上で農業を營んで居る國民或は民族の文化を農業文化とか農耕文化と云つてゐるやうであるが、こゝで特に農耕文化と云ふのは、單に農業耕作の有無といふことではなくて、近年民族學の上で幾らか特殊化して使はれる一

つの文化複合體の類型の名稱としてである。それは民族に依つて狩獵或は牧畜を主體にし、或は農耕を經濟生活の特質として居る爲めに、そこからその民族の文化全體に異つた性格が現はれて來るのを言ふのである。しかし又、それは從來の經濟史的な考方に多くあるやうに、人類は總て狩獵時代から出立して牧畜時代に進み、それから農業時代に發展すると云ふ縦の進化段階に於ける農業時代の文化、換言すればすべての民族を通じての文化の發展程度の問題をいふのではない。むしろそれは謂はゞ横に諸民族の癖として、或は風土環境の影響から、狩獵、牧畜、或は農業等特異な生産形式に傾き、そこに民族文化の類型が分化するといふ想定に基いてゐるので、同時に其の文化の類型は唯農業、或は牧畜を主な生産方法として居ると云ふだけでないに、それに絡んで社會制度や、衣食住の形態から、その精神文化の方面に於ても道德、宗教、或は藝術の上にも各々一定の特徴をもつた一つのコンプレックス、複合體を成したもののうちで、特に農業形態を含み、又これを發展せしめた一類型としての農耕文化である。

この農耕文化の最初の形を今に大體其まゝ保持して居ると思はれるのは、東亞に於てはニューギニアに居るパプア型

の人種であるが、此の人種の若干の混血はチモール島やモルツカ群島及びフィリッピン各島の奥地にも見られるが、一方同じ頭型の遺骨やこれに附随する石器は佛印やビルマ邊からも發掘されて、太古おそらく後期舊石器時代には、この系統の人種はひろく東南アジアに居たと思はれるのである。それでかやうな人種の間で發生した文化は現在のニューギニアのパプア人に於て我々が見るやうに、衣食住その他の形態も極めて原始的ではあるが、既にそこに所謂農耕文化の初期の型が現はれて居る。それは耕作といつても極く幼稚なやつと芋類を栽培する位のものではあるが、しかし必要に迫つて山に行つて芋を掘るのではなしに、兎も角その根を持つて來て自分の住居のそばへ植ゑて置くといふ點では、生産手段としても人類文化の一飛躍ではある。そして是が幼稚ながらも農業をやると云ふだけでなく、之に伴つて衣食住其他の文化の特殊な形態を取つて來るのであり、特にその社會制度としては、母權制度なるものが現はれて居る。

こゝで母權と云ふのは女が男の上に立つと言つた様な女權主義ではなく、今でもスマトラ西部のミナンカバウ人に於て見られ其他臺灣の東海岸のアミ族にも殘つて居るやう

に一の制度として女性が總て社會組織の根柢になるものである。勿論家庭の内部では女は女らしく夫に仕へて居るが、外へ出た時には夫は權能がない。即ち結婚制度が招婚婚とか去來婚とか云つて、多くは母方居住婚の形式になり、結婚後少くとも子供の出來る迄は男の方から妻の家に通ふが、その後は別に家でも作るか、さもなくば男の方が妻の家に入家すると云ふ形になる。だから家系の相續も女子殊に長女が多く相續人となり、男子は生家に殘つて別居のまゝ妻をもつか、或はそこへ養子に行つて仕舞ふ譯である。従つて血統を數へる場合にも親と言へば勿論母親のみが考へられ、父の方は親の中に數へない。これは農業耕作の方法を發見したのが女子であり、その仕事が徹底的に女の手にあつて、經濟力を全く女性が握る様に成つたからだと説明する人があるが、兎に角農耕文化と云ふものゝ一要素として母權制度と云ふものは極めて重要な地位を持つて居る。しかもそれが社會組織の上だけでなくて、一切の道德的慣習から宗教的信仰の上にも關聯して、農耕的な所謂文化複合の特殊性を示すのである。

それでこの農耕文化の宗教上の一の特質は、その主なる神が女神であり、またこれに仕へる神官とも云ふべきもの

が、プリステス、即ち女祭司であり、簡単に言へば巫女で有ることが多いのである。しかもそれが女性の常として兎角神憑りになり、殊に死者の靈なんか憑つて来たやうな場合には口寄せ等も行つて、癒病その他卜占の儀禮など單なる神仕への外に、すべて宗教的な事柄は、殆どこの巫女の手で行ふことになる。同時にまたその信仰する主な神々は殆ど女神の姿に於て現れ、ことに東亞の農耕文化に於てはそれが民族的大祖を意味する母祖神を最高位に置くことになつて居る。たゞ從來西洋の學者はこの農耕文化の性質を考へるのに、先史時代のクレタの島を中心とするエー

ゲ海文化を典型として見てゐるので、そこに現れた女神の觀念が特に大地の女神となつて居た事實から、之を一般的に *terra Mater* 地母神として解釋し、動もするとこの地母神の信仰を東亞の領域に迄必然的のものであるかのやうに説いたのである。然し、此の邊の問題を少し立入つて觀察してみると、南方諸島の處々で天の男神に對して地の女神が配されてゐるのは、この地域に於てはやゝ後期の農耕文化に於ての一つの變化であつて、その初期に於ては、この女神は、たゞ母或は母祖と名付けられてゐるのが多い。即ちインドネシヤ語ならイブとかイナ、或は之を祖母ネネと

も言つて居る。此の場合の母、祖母と云ふのは、我々の云ふ母、祖母と云ふ意味のみでなく、母權制の下では親神といひ祖神と云ふ意味であつて、大體母祖神と云ふのがこの文化に於ける大神の特徴となつて來て居る。

この様な初期の農耕文化に次で東南アジアに於ける中期農耕文化といふべきものは、北部後印度から西南支那に懸けてあらはれたパレーモンゴロイドと呼ばれる民族の間から起つた様である。このモンゴロイドとかモンゴルと言ふ名前を西洋の人達は餘りに廣く濫用する嫌があるので、私は是を原東亞人と呼びたいと思ふのであるが、これは言語の上ではモンクメル語系に屬するものであり、或は廣くオーストロアジア語系に繋つて東部印度から南方大陸一帯に擴がつて、中期の農耕文化をこの地域に發展擴大させたのである。たゞ人種層としては多分中央亞細亞から來たと思はれる脊の高い長頭型の人種がチベットの東南部から西部ビルマに移動して來て、この原東亞人と混ると同時に其の農耕文化を受け入れて東印度諸島に擴がり、群島一帶の農耕文化を躍進せしめたので、この系統の民族の體質的特徴が今に若干残つてゐるのを人種學上特にインドネシヤンと呼んでゐる。兎に角、この原東亞人に發源して東印度諸島

に擴がつた農耕文化は、初期のそれに較べて芋を作るとか、サゴを取るとか云ふ原始的な形態から、やがて穀物の栽培に進み、殊に東亞の農耕文化としてはその末期はすでに稻米を作ると云ふ段階に進んだらしい。勿論これは記録のある歴史時代よりも、以前に、大體前期新石器時代まで溯り得るのであつて、佛印領内から黄河沿岸にまで繋がる特殊な先史學的遺物や石器の型によつてその分布の跡付けも出来るのである。

しかるにこの農耕文化が世界で他に殆ど例を見ない稻米をその主要作物として取り上げたことは、やがてその文化の様式と民族生活に一つの特殊性を齎す譯なのである。ひろく農耕文化と言へば北部アジアにも點々とその跡が見出され、カスピ海の東南沿岸に近いアナウには何萬年前と云ふやうな遺跡も指摘され、メソポタミヤにしても、エジプトにしても、それが傳播した時代は非常に古いのであるが、これら各地での農作物は、大體に於て先づ麥であつた。ところがこの東亞農耕文化に於ては、一方では、黍や粟を作つて居ながら、すでにこの時期に稻を作るやうになつて居るので、こゝに稻米と云ふ特殊な作物をめぐつて、その民族文化の全般に種々な特性が現はれてゐる。第一稻

は相當長い栽培期間を要し、一年中が殆ど耕作と云ふことで滿されてゐるから、これに伴ふ社會の種々の行事が季節に配當されて年中行事の形になり、それら特殊な季節的行事から日常生活の調子までが全く他には見られない特異性を示して來るのである。私の貧しい稻米儀禮の研究の一端も、實はこの點に興味を持つてやりかけたのであるが、一面西洋の學者が稻の耕作と之に關する社會的風習や儀禮信仰等を報告して居るのを見ると、東洋人としては甚だ齒痒い所もあるので、少し深入りしてそれらの行事等を調べて見たのである。

一體この時代の稻の栽培の仕方は、今でも南方地域に残つて居る多くの未開民族に見るやうに、我々の云ふ火田式の燒畑農業であつて、毎年原生林を伐り拂つて火をかけ、燒跡の灰をならしては種籾をばら蒔いて、後から穂が出て來る儘にトワイといふ小刀で一本づゝ拔穂の刈入作業をするのである。従つてそれは進歩した稻作の常耕畑とするよりは勞力も多く、かつ長い期間を要して殆んど一年中がこれのみに費されるので、そこに女子ばかりでなく男子の協力も必要になつて、母權的な社會制度に大きな變動もあり、男女の長老に支配される大家族生活も現はれるが、全體

にこれが民族の生活文化を特色づける原動力にもなつてゐる。しかしこれがさらに次の後期農耕文化になると、水田耕作の方法が發展して一層その特色が強化されるばかりでなく、牧畜文化の影響もあつて牛馬を耕作に使用することになり、水牛や豚の飼育からも文化的色彩が全面的に變つて来る。この後期の農耕文化特に農村文化と呼ばれるものは、原東亞人にさらに西北の人種的要素の加はつた中支以南の民族層によつて發展せしめられたらしく、それが印度の東北から後印度一帯にかけて南下したのが、現在の大陸に於ける南方人であり、その一部は東印度諸島に於て先住の原南島人と混合して普通にプロトマライと呼ばれる住民層を成したのである。それで水田作の方は遙か後に文化の進んだ印度人から傳つたといふ想定もあるけれども、現在東南アジア一帯の未開民族にも、例へばスマトラのバタク人、セレベスのトラジャ諸族、フィリッピンのイフガオ族、ティンギアン族等すでに多くの民族的傳統をもつて水田耕作をやつてゐるので、それは各民族の生活文化の基調ともなつてゐるのである。

もつともこれが更に歴史時代になつて支那や印度の高級な文化の感化をうけ、特にその宗教文化を中心として新東

南アジア民族ともいふべき層が力強く擡頭したことは事實であるが、その民族文化の基底はこの中期乃至後期の農耕文化であつて、その宗教的信仰や儀禮の面に於ても、佛教、印度教、回教及びキリスト教の形式が、却つてこの民族的要素に支配されてゐる位である。少くともその農耕生活と直接に結ついた宗教は、これら高等宗教よりも前代の民族的信念と儀禮とが主となつてゐて、全體として耕作は單なる物資生産ではなしに、それ自體が宗教的な意味をもつ營みであり、神祖と共に在る一つの聖業として行はれてゐるのである。だからその耕作の諸過程には、最初の山林伐開から焼立て、種まき植付から最後の刈入まで、一年を通じてこれに種々の祭儀が伴ふ。そしてこの間我國でいふ雨乞や蟲送り、風祭に實入時の行事に類するものもあり、倉入のあとには新嘗または神嘗ともいふべき宗教的行事もある。その上こゝにも農耕文化の母權的傾向が強くあらはれて、農事には女性が主になつて働いて居る。ことに田植などは女でないとできないと云ふ傳統が諸民族ともひろく行はれてゐて、男の田植は禁忌となつてゐる。それは何故かと云ふと、男の手はタガンバナスと言つて、熱い手、穢れた手であるから、男が植ゑたら苗が腐つてしまふとジャ

ワでは云ひ傳へてゐる。この傾向は我國にもなほ多少見られるので、初田植の日だけは男は遠慮しなければならず、この日は家にゐて御飯炊や子守をすると云ふやうな風習が残つてゐる。これは宗教の保守性と言はうか、社會習慣の傳統性と言はうか、何千年來の農耕文化に共通な極めて古い要素の残存と考へられるのである。

それでこの稻作についての考へ方と聯關して、東南アジアの諸民族には極めて特殊な靈魂觀念があり、是が中期農耕文化の段階に於て一種異様な發展を遂げ、世界でも餘り類例を見ない内容をもつてゐる。この靈魂信仰を従來西洋の學者はアニミズムといふ術語で表現して居るけれども、もし強いて西洋の言葉を使ふならむしろアニマチズムと言つた方がいゝので、それは靈魂とはいつても各個人の固有な個體的な靈魂ではなく、むしろ人や物に共通な、普遍的な一つの生命として動いて居るものを言ふのである。此の點主として牧畜文化の系統から來て居る靈魂の觀念、支那でも魂とか魄とか云ふ字に盛られて居るものゝ意味は各人に固有な靈魂で、人が死んだ時に後に残つてその身柄に代り、祭祀の對象にもなれば天國や地獄に行くものとなつて居る。ところが此の東南アジアの特殊な靈魂と云ふのはマ

ライ語でスマンガツと云ひ、ジャワ人がニヤワと言つて居るものなど、是は寧ろ生きた人間の生命の元になる魂で、個體的な存在であるよりはすべての人々に共通に存在する所の尊い生命であり、或は祖先から或は神から人々はこれを分けて貰つて居ると云ふ考へ方が多いのである。そこで今の稻米もまた人間を除いては、有らゆる動物植物を通じて最も多くこの魂を持つてゐるものである。それは稻が本來持つてゐるといふより、稻を作つてる中に養はれて來るもので、稻が實を結ぶのも神なり祖先なりからこの尊い魂をその中に吹き込んで貰ふからであり、またこの生命を育てると云ふ心持で人々は耕作をしてゐるのである。だから適當な祭儀を行はないで出來た稻や米は、滋養もない力もない、魂が抜けた稻米でしかないので、この人々に取つて米と云ふものはたゞの物質ではなく、魂の宿つた尊い生き物である譯である。これは甚だ幼稚な信仰のやうでありますけれども、こゝで幾らか我々の反省の材料にもなるのは、さう云ふ耕作労働をしながら、何時もそれが先祖と共にあり、神の力によつてこれが育つて行くのだと云ふこの人々の信念である。現に種蒔祭などに踊をやつて居る時の歌の意味を聞いて見ると、今こゝで親様達の懷へ此の大事

の種、粃を御預けするが、其の親様達の乳で稻が立派に育ち、豊かな魂を持つ實を結んで、お互の生命が續くやうにと言ふ喜びやら願ひやらを述べて居る。一體田の實のりと言ふことについて、この地方でそれを稻の妊娠と言つたり、性的な聯想を少しは持つて居るやうであるが、兎も角も親神の育ての力で稻の魂が出来、それが本當の意味で實入りして行くんだと云ふ點は、相當考へされる問題ではないかと思ふ。

現に我々日本民族に於ける稻作は、これが美食であると經濟的であるとかいふ意味では行はれてゐるのでなく、また單に支那風の考へでいふ農は國の大本といふだけの意義ではなしに、民族の傳統としての道義的な内容をもつてゐる。それは書紀の一書にあるやうに、天孫降臨の際、我々の大御親の神が天上の齋庭に御作り遊された稻穂を皇孫に御手渡しになつて、是が子孫國民の生命の元だと詔されたところに、一つの象徴的の話ではあるが、重大な意味がある。少くとも三千年來我々は祖先から今の農民に至る迄、斯やうな心持を以て耕作を第一とし民族の生活を保持して來た。それは決して今日言ふ農事改良とか農村更生とか云ふ意味で、たゞ機械的に能率を上げ、數量的に増産を

計ると云ふ算盤づくでやる農業ではなく、民族の生命、魂を育てる稻の耕作ではなかつたか。だから日本では正月の行事からして殆どみな神様の來臨を仰ぐ農事始の儀禮の變化であり、それが歳の終に迄つゞく年中行事となつて、中には寺院に持ち込まれて佛教の形式になつたものもあり、神社行事として形式的に嚴しくなつたものもありながら、本來は農民自身が神に仕へ先祖と共に働く氣持で、耕作をしながらこれらの行事をつとめたのであつて、かくて民の命の支持者となつて行く氣持の表現が、實は日本民族の固有の宗教に外ならない。所謂近代人はこれを單に農民の信仰だとか田舎者の迷信だとか言ふが、確かにそんな迷信的な點もあるけれども、其の本來の意味を汲取つて見れば、そこに日本の民族的な信仰の根が動いてゐる。日本民族が最初民族としての集團生活を始めた時、それはすでに彌生式文化と云ふ形を持つて、農耕生活も營み水田耕作にまで進んでゐた。この事は單に日本民族が南から來たとか、北へ遷つたとか云ふ問題でなく、少くとも南朝鮮から西日本にかけての文化圏が、原東亞人なるものが發展せしめた農耕文化につながることを意味するので、それが村落文化などと言はれる段階に發展すると、その社會制度は父權制に

なるが、宗教信仰の上からも最初の母神と云ふ信仰と同時にひろく祖先に奉仕する祭と相俟つて、謂はゞ敬神崇祖と云ふ宗教的傾向を徹底させる。しかもその生活文化は稲を作つて米を食ふと云ふことが根になり、それに特有な一つの世界観として民族全體の魂といふ觀念による一種の共同生命觀が見られるのである、また神の觀念にしてもこれを全然人間と別なものと考へないで、過去又は現在の人間を其の儘神として仰ぎ、神祖一體、神人合一の所謂一如的な信念に立つところは、他の世界の宗教には餘りない寧ろ東亞型と言ふべきものである。是が強ち稲を作り米を食ふと云ふ生活のみから來るのではないが、今言ふところの農耕文化の一面としては、稲や米が魂あるもの、命のこもつたもの、神の授けもの、先祖の賜りものと考へられて行くところから、今言つたやうな一種の世界觀や信念も生れて來るのであつて、これがスマトラのバタツク族のやうに人を食ふ習慣をもち、ボルネオのダイヤク族のやうに首狩の蕃風をもつたものによら、其の根底にこれら民族文化の特殊な性格として現はれて居ることは度外視してならないのである。

(了)

會 告

舊事紀訓解 單行本近刊

舊事紀訓解は本會紀要別冊たる文獻蒐載卷二十七より連載中の處、種々の事情により一回分の頁數僅少にして、現在の進行狀態にては完結迄に今後多大の歲月を要する見込みなるを以て右計畫を變更し、明世堂書店に托して單行本として刊行することとせり。

右會員諸彦の御諒承を乞ふ。なほ明世堂發行の單行本は本會にてはその頒布を取扱はず。故に購讀希望者は左記に申込まれたし。

發行所 明世堂書店

東京都澁谷區大和田町一
 振替口座東京八三九三三番
 電話澁谷 (46) 三八〇二番